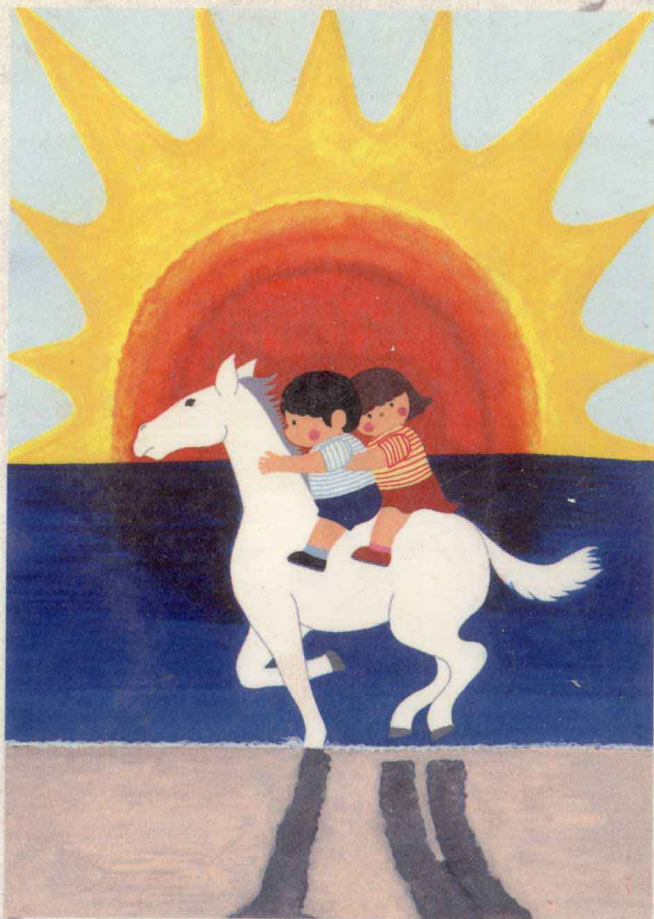


私のパートナー

第4回ありのまま大賞受賞作品集

ありのまま舎 編

その名は情熱



第4回ありのまま記録大賞受賞作品集

	私
そ	の
の	パ
名	ー
は	ト
〃	ナ
情	ー
熱	
〃	

ありのまま舎 編



社会福祉法人ありのまま舎

障害者の自立企画の推進をめざし、福祉総合誌「ありのまま」発行、身体障害者福祉ホーム仙台ありのまま舎の運営、障害者ありのまま記録大賞・同絵画展の企画運営、ありのまま生活福祉講座の開催など、各種事業を行っています。

〒982 仙台市西多賀4丁目19-1 TEL022(243)1300

私のパートナー

その名は「情熱」

定価 一〇三〇円

(本体一〇〇〇円+税三〇円)

一九八九年三月二〇日 第一刷発行
一九八九年四月二〇日 第三刷発行

編者 社会福祉法人ありのまま舎

理事長 斎藤久吉

発行者 永井晴彦

発行所 有限会社 エフエー出版

〒460 名古屋市中区栄一丁目22-16

電話 〇五二―二三二―一九三五

振替 名古屋五一六一四五―

印刷 刈谷高速印刷

製本 飯島製本

© 1989

ISBN4-900435-76-7 C0095 P1030E

●はしがき

人生を書き綴ること

主宰者 山田 富也

人は、それぞれの人生の中で、いろいろな人と出会い、様々な関わりを持って生きて行くものである。

幼い頃は父母や兄弟といった家族とのふれあいがあり、成長するにつれ友達ができ、楽しい学生時代の思い出がつくられ、さらに社会人になってからは働くことの喜びと共に、より広範囲の様々なジャンルの人々との出会いが待ち受けている。

そして、人生の三分の二以上を伴侶として暮らすであろうパートナーとの出会い…結婚…、子供が生まれ、家族としての絆が年輪を刻み込むように密度の濃いものとなり、そうしたかけがえのない者たちによって築かれる家庭という小さな集合体は、時には暗礁に乗り上げるほどの危機をはらみながらも、何物にもかえがたい人生の充足感をもたらしてくれる。

しかし、障害者、それも生まれながらに難病を背負っていたり、また突然の事故で生涯を身体の手と闘って行かざるを得ない者にとってはどうだろうか。彼らの人生は障害を負っ

たことで一変し、心身共にあらゆる辛酸を嘗め尽くし、精神がズタズタになるほどの苦闘を強いられながらも、それでも絶望と諦めのどん底から這い上がって来るのである。

それなのに、それをいともたやすくみんな十把ひとからげのように、障害者の人生とはこんなものだと思いつけてしまう社会通念は非常に残念でならない。障害者として、それぞれの生きざまや思いはあつてしかりなのであるから……。

私の中でそうした思いがどんどん蓄積されて行き、それが嵩じて何らかの形で社会の中でまだまだ弱い立場に追いやられている障害者の人生に光を当てることはできないかと生まれたのが、この『ありのまま記録大賞』である。

寝たきりであっても、口述筆記であっても、どんな形でも自分の思いは表現できるはず、それは、障害を背負ったからこそ出せる真情であろう。

澤地久枝さんが、ご自身も好きな言葉として贈って下さった、「われらの悲しき事業はほろびない。火花からやがて焰が燃えあがる」は、まさしく的を得た人生訓である。いつかは燃えあがるような思いや人生を、私たちもめざさなければいけないし、そのためにも、私たちは常に内にこもるのではなく外へむけて志向し続けて行くことが大切である。

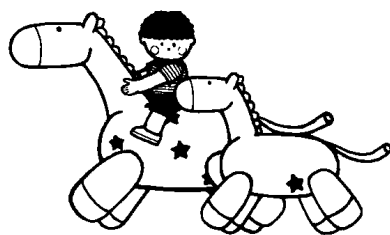
ありのまま記録大賞も、御陰様で第四回を終了し、またここに新たな作品集を世に送り出すことができた。

何百編もの詩やノンフィクションを最初の段階で荒読みする一人の作業者として私も、毎回、良い作品に巡り合う度にホロッとさせられたり、また思わず苦笑させられたりと、見ず知らずのこの賞を通して知り得た沢山の仲間の人生を垣間見させていただいている。

それは、自らも障害を負っている私にとって決して楽な作業とはいえないが、しかしこれだけは誰の手にも委ねられないし、それだけ、いつも神聖な気持ちと誇りをもって作品に向かわせていただいているつもりだ。

第五回も、恐らく沢山の作品が全国から寄せられることだろう。今回こそは大賞を、の夢を第五回へとつなぎ、いつかウーンとうならせてくれるような作品に巡り合いたいと願っている。それも、そんなに遠い将来ではないだろうと信じつつ……。

● 目次／私のパートナーその名は情熱



●はしがき

人生を書き綴ること

山田 富也

●贈る言葉

ひかえ日な表現者たちよ！

ノンフィクション作家

澤地 久枝

小さな奇蹟

詩人

天沢退二郎

●ノンフィクション

私のパートナーその名は“情熱”

■いくつもの障害を背負いながら司法書士・行政書士として自立の道を歩む

村上 牙子

●詩

道

流動的な詩人

伊藤 義雄

53

音

耳鳴り

死んだ耳

長田 正孝

59

●ノンフィクション

夢のたわむれ

■遠位性筋萎縮症で歩行困難をおして働く商社マン

酒向 祥二

69

一本の葦として

■首の骨を折り胸から下がマヒ。家族の声援を受けてリハビリに励む

萩原 義明

117

螢 火

■交通事故で青春を車イスの生活に。自然を愛し俳句に生きがいを求める

北村 保

157

みつつん、ごめんね

■残された数か月の命を愛する夫や子供たちと力一杯生きる

荒尾 緑

199

あとがき

福田 法子

233

イラストレーション・佐藤 行央

■セキツイを損傷、口で鉛筆をくわえ生きる希望を描き続けている



●ありのまま記録大賞 ノンフィクション部門優秀賞・久保田稔特別賞

私のパートナーその名は“情熱”

村上 淳子

murakami satsuko



村上冴子（むらかみさえこ）——一九三五年生まれ。五四年七月、結核性腹膜炎・多発性関節リウマチを発病後、約十年間、左右の卵巣摘出、胆のう壊死による摘出、全身性エリテマトーデス、左腎臓摘出など病魔と闘う。さらに七九年五月、ステロイド性骨粗鬆症で背骨を骨折、八三年まで六回も同様の骨折を繰り返す。こうした闘病の間に、七四年に行政書士、七八年に司法書士試験に合格。現在、仙台市内にて開業し活躍中。

▼全身性エリテマトーデス及びステロイド服用による骨粗鬆症
（仙台市在住）

幸せな結婚、そして……

股関節脱臼こかんせつだつぎゅうのため幼い頃から足が不自由だった私は、他の姉妹たちのように、働きながら夜間高校に通うことは無理でした。ですから、中学を卒業すると、学業をあきらめて祖母に和裁の手ほどきを受けながら家事一切を身につけるよう母に説得され、自分でもそれが最善の方法だと、一応納得したつもりでおりました。

ところが、毎日家に居て、祖母とふたり、家族みんなの食事の世話や和裁の稽古だけで一日を過ごしていることが非常につまらなく思えて、いつしか私も外に出て働きたいという思いがだんだん心の中に大きく広がってまいりました。

私は、誰にも言わずにせっせと履歴書を書き、新聞の求人広告を見ては面接試験を受けに出かけました。ところが、「足が不自由で、十分に仕事が出来ますかねえ」と、じろじろ私を見たのち、「通知は後日郵送します」という決まり文句と、日を置かずしての不採用の通知で、すべての望みを断たれてしまったのです。

これが最後だと決めて臨んだ面接試験も、前に受けた何回かのそれと全く同じ感触に終わった帰り道、私は悔しさにうちふるえ、心の中でこう叫び続けました。

（私は、他の誰よりも真面目に、一生懸命仕事を覚え、完璧に行うつもりでいるのに、足が不

自由だからということを理由に、機会すら与えられないなんて……」

これらのことを、私は祖母にも母にも話しませんでした。祖母が私の様子を母に話したらしくて、しばらく経ったある日のこと、母はさりげなく私に申しました。

「知り合いの行政書士の事務所でタイピストの見習いを探しているけれど、その事務所で働いてみる気持ちはあるか」と。

「一生懸命働く。どんなことでも頑張って、一日も早くみんなの役に立てるように努力する」と返事をしながら、私は心の中で万歳を叫んでおりました。

母は、働くことについて、私に次のように注意しました。

「身体の不自由な者を使って下さる方のご好意に応えられるよう頑張らなさい。そして、いつでも、どんなときでも、その場で必要とされる人間にならなさい」

希望に満ちて勤めはじめた私は、タイプの仕事にも慣れ、だんだん仕事の面白さも分かってきて、一日の欠勤もなく張り切って働いておりました。

働き始めて二年ほど経った頃、私は縁あって結婚しました。そして、あれほど執着した「外へ出て働きたい」という望みも、愛しい人と新しい人生を歩めるといふ喜びの蔭に霧のように消えてしまっていたのです。私は、十八歳のなかばでした。

真面目で働き者だった夫と、菩薩様のように柔和で、心根の優しい姑とともに始まった私の

新しい生活は、貧しかったけれど静かで幸せな日々でした。姑は、若い嫁である私のためにいつも優しく心遣って下さいました。職業夫人であった私の実の母に甘えるよりも、もっと「お母さん」と甘えたいくなるような人でした。

看板屋のおかみさんとして、私は家業を手伝うかたわら姑と協力して家事にいそしんでおりました。平和そのものの生活でした。

しかし、その平和は私の発病という全く予期せぬ出来事によって、無残にも踏みにじられてしまいました。

虫垂炎の手術によって発見されたその病名は、結核性腹膜炎ということでした。ところが、発見が遅れ、内科的治療では間に合わず、卵巣腫瘍や胆のう壊死などにより一年おきに開腹手術を受け、悪いところはすべて切り捨てるという外科的治療を受けました。

その間にも多発性関節リウマチを患い手指の関節が痛むときには、洋服のボタンがかかれなかったり、肘の関節が痛めば、髪をとかすことも、口に食物を運ぶことも困難になりました。ことに肘と手首の関節が痛むときは辛く、夜、掛け布団が足の方へずれてしまっても、両手で肩まで持つてくることができず、背中と足を使って一度布団の方へ体を移動しておいて、それから布団の端を口にくわえて、首を動かしながらぐいぐい引っぱってくるというようなやり方をしたものです。

この病気は、動かさないでいると関節が固まってしまい、ほんとうに動けなくなってしまう

と聞いておりましたので、そうなるは大変だと、痛みに耐えながら動かす訓練を続けました。事実、朝起きたときには手首から先の関節がすべて腫れて、手を握ることさえもままならぬ状態なのに、頑張つて動かしているうちに、夕方ごろには腫れもひいて動きもかなり楽になるのです。

それにしても、自分の意思のおもむくままに体が動いてくれないということほど悔しいことはありません。

そのような辛い思いをしていた十年目のある日、体全体に紅斑が出て、四十度を超える熱が何日も続きました。そして、私は十六回目の入院をすることになりました。そのときすでに、二十八歳になっておりました。

病名は「全身性エリテマトーデス」という難病であるとのことでした。

この全身性エリテマトーデスという病気は膠原病こうげんの一種で、日本名は紅斑性狼瘡という血管の病気だということでした。さまざまな症状がありますが、最も多く見られる症状は、顔面(両頬)にちょうど蝶が羽を広げたような形で紅斑が現われることで、その当時の私は、人相も変わるほどはつきりと、その症状が出ていました。また顔面だけでなく、体じゅうのいたるところに紅斑が出て、ちょうどしもやけがくずれそうになったような状態でした。それだけではなく、高熱が続き、関節痛や筋肉痛も伴い、それこそ寝ているだけがやっとというほどの状態でした。